「イエスの名によるバプテスマ」　　２０２６年１０月１１日　　シニア礼拝
使徒言行録　第１９章１～１０節

今日の聖書の箇所では、バプテスマのことが問題となっています。しかも、ここではどのようなかたちでバプテスマを施したのか、また誰がバプテスマを授けたのかが問題になっているのではなく、誰の名によるバプテスマであったのかということが問題になっています。この背景にはこの当時の教会の中で起こっていた党派性という問題があったと考えられます。自分はだれの派閥に属するという問題です。コリントの信徒への手紙一の中に、パウロの苦悩の様子がうかがえます。新約聖書２９９ページ、コリントの信徒への手紙一の１章１２節以下でパウロはこう語ります。【あなたがたはめいめい、「わたしはパウロにつく」「わたしはアポロに」「わたしはケファに」「わたしはキリストに」などと言い合っているとのことです。キリストはいくつにも分けられてしまったのですか。パウロがあなたがたのために十字架につけられたのですか。あなたがたはパウロの名によってバプテスマを受けたのですか。】

ここにも「パウロの名によるバプテスマ」という言葉が出てきますが、パウロはそんなものは存在しないのだという思いをこめて、あえてそのような言い方をするのです。つまり、「パウロの名によるバプテスマ」とか、「アポロの名によるバプテスマ」、「ケファ、ペトロの名によるバプテスマ」などというものは存在せず、同じように「〇〇牧師の名によるバプテスマ」などというようなものは存在しないし、たとえそのようなものを施したとしても、それはキリスト教の救いとはまったく関係のないもので、それら一切のものは、「イエス・キリストの名によるバプテスマ」とは根本的に次元が違うものなのです。

かつて学生紛争が盛んだったころ、ある学生がその影響を受けて教会批判をしたことがありました。その学生は自分にバプテスマを授けてくださった牧師を批判し、牧師にこう詰め寄りました。「僕はあなたからバプテスマを受けたが、僕はあなたを認めないから、このバプテスマは無効である」。その時、牧師はこう答えたそうです。「バプテスマは私が授けたのではない。それはイエス・キリストによるバプテスマだ」。

イエスの名によるバプテスマ。これはいったい何を意味するのでしょうか。

出エジプト記１４章に、エジプトの奴隷から解放されたイスラエルの民がモーセに導かれて逃げていく際に、エジプトの軍隊に追われ、乾いた海を渡っていく場面が出てきます。パウロは、コリントの信徒への手紙一の１０章で、この乾いた海を渡っていくことをイスラエルの民のバプテスマであると理解します。１０章１節以下には、次のように記されています。【兄弟たち、次のことはぜひ知っておいてほしい。わたしたちの先祖は皆、雲の下におり、皆、海を通り抜け、皆、雲の中、海の中で、モーセに属するものとなるバプテスマを授けられ、皆、同じ霊的な食物を食べ、皆が同じ霊的な飲み物を飲みました。】

乾いた海を渡っていったイスラエルの民の出来事を、パウロがバプテスマと表現したのには理由がありました。エジプトの奴隷だったイスラエルの民を解放するために、神様はモーセを用いてさまざまな災いをくだします。けれども、エジプトの王ファラオは心をかたくなにして、イスラエルの人々をエジプトから去らせようとはしませんでした。そこで神様は、最後の災いを降されます。神御自身がエジプトの町の中を通り過ぎられるとき、神の裁きが降されます。そこにいるすべての長子、エジプト人も奴隷も家畜も、すべての

長子の命が失われるのです。長子が奪われるということは、その家の跡継ぎを失うこと。すなわち、家の存続が失われてしまうことを意味します。そのようにして神がエジプトの町を通り過ぎられるとき、そこにいるすべての人々に神の裁きの災いが降るのですが、エジプトの奴隷だったイスラエルの人々の上にその災いが降らないように、神様はイスラエルの人々に主の過越の犠牲を屠り、その犠牲の血を家の玄関の鴨居と二本の柱に塗ることを命じます。その血のしるしが目印となって、神様はその家の入口から入ることはせず、その家には災いを降さないで過ぎ越していかれる。こうしてイスラエルの民はその長子を失うことなく、エジプトの家中が長子を失い混乱しているのに乗じてエジプトから逃げ出していきます。ところが、エジプトの王ファラオはイスラエルの民を去らせてしまったことを後悔し、エジプトの軍隊を送り込み、イスラエルの民をエジプトへと連れ戻そうとします。この出来事は、罪の奴隷だった私たちが罪から解放された際に、罪の誘惑が私たちを再び捕らえて、罪の中に連れ戻そうとする出来事を象徴的に表しています。罪から誘惑は、私たちが罪から離れても、その魔の手を伸ばして再び罪の中に引き込もうとするのです。そこで私たちは、罪の誘惑から完全に解放されるために、バプテスマを受ける必要があります。エジプトの軍隊に追い迫られたイスラエルの民が海の前に来ると、神様はモーセを用いて海を分けます。イスラエルの民は乾いた地を通り向こう岸にたどり着きますが、後から追いかけて乾いた海に入っていったエジプトの軍勢は、海の水が戻ってきて全軍が海の中に沈んでしまいます。こうして、罪に引き戻そうとする誘惑の魔の手であるエジプトの軍隊は水の中に沈み、それ以降、エジプトの軍勢がイスラエルの民をエジプトに連れ戻そうとすることはありませんでした。イスラエルの民は、完全に解放されたのです。

この出来事、私たちの古い体が罪に対して死に、新しいキリストの命に生きることを、パウロはローマの信徒への手紙の６章でくわしく述べています。新約聖書２８０ページになります。ローマの信徒への手紙６章１節、【では、どういうことになるのか。恵みが増すようにと、罪の中にとどまるべきだろうか。決してそうではない。罪に対して死んだわたしたちが、どうして、なおも罪の中に生きることができるでしょう。それともあなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスに結ばれるためにバプテスマを受けたわたしたちが皆、またその死にあずかるためにバプテスマを受けたことを。わたしたちはバプテスマによってキリストと共に葬られ、その死にあずかるものとなりました。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中から復活させられたように、わたしたちも新しい命に生きるためなのです。もし、わたしたちがキリストと一体になってその死の姿にあやかるならば、その復活の姿にもあやかれるでしょう。わたしたちの古い自分がキリストと共に十字架につけられたのは、罪に支配された体が滅ぼされ、もはや罪の奴隷にならないためであると知っています。死んだ者は、罪から解放されています。わたしたちは、キリストと共に死んだのなら、キリストと共に生きることにもなると信じます。そして、死者の中から復活させられたキリストはもはや死ぬことがない、と知っています。死は、もはやキリストを支配しません。キリストが死なれたのは、ただ一度罪に対して死なれたのであり、生きておられるのは、神に対して生きておられるのです。このように、あなたがたも自分は罪に対して死んでいるが、キリスト・イエスに結ばれて、神に対して生きているのだと考えなさい。】　ここに記されていますように、パウロはバプテスマを、キリストの十字架と共に死に、キリストの復活と共に生きることと語ります。このように、イエス・キリスト

の名によるバプテスマは、私たちが先週学びましたバプテスマのヨハネによる悔い改めのバプテスマとは違い、死んでよみがえることを象徴的に表しているバプテスマなのです。

「イエスの名によるバプテスマ」。それは、イエス・キリストとの間に特別な関係を築くことを意味します。特別な関係とは何か。こちら側からは、イエスをキリスト、唯一の救い主として信じるということ。そして神様の側からは、その救いを有効なものとして私たちを御救いにあずからせてくださり、聖霊を授けてくださること。すなわち、イエスの名によるバプテスマを受けることと聖霊を受けることは、同時に起こってくる切っても切れない関係なのです。このようにして「イエスの名によるバプテスマ」を受けた者、すなわち聖霊を受けた者たちは、さまざまな霊の賜物を受けます。それは人によって異なった賜物です。語る賜物、賛美の賜物、証しの賜物、伝道の賜物、それは一人一人違う賜物ですが、それらの賜物に関して共通することがあります。それは、それらすべての賜物が、聖霊を通じて神から来るということです。今日の聖書の箇所の続きを読んでいきますと、使徒行伝１９章１１節以下で、パウロが目覚ましい奇跡を行ったことが記されています。そしてその後には、イエスの名を試みに唱えた者たちが見事に失敗する出来事が出てきます。この２つの出来事を見てみますと、「イエスの名前」そのものに力があるわけではありません。お守りやお札がただの紙切れであるのと同じように、「イエスの名前」そのものを語っても何の力にもなりません。パウロが目覚ましい奇跡を行うことができたのは、パウロがクリスチャンになることによって特別な力を授けられたのではなく、そんなふうにパウロ自身の力によるのではなく、パウロとイエス・キリストとの間に特別な関係ができた、その関係によって、パウロの手を通してイエス・キリストが働かれた。これが聖霊の働きなのです。このことに関しては、次週の礼拝でご一緒に学びたいと思います。

私たちはクリスチャンになって、一人一人違う賜物を受けます。ある人は語る賜物が与えられ、ある人は賛美の賜物、また証しの賜物や伝道の賜物、それは一人一人違う賜物ですが、それらの賜物を通じて、そこには実は神御自身が働かれておられる。キリスト者の力は、キリスト者が知っている神、信じている神、キリスト者と関わりを持っておられる神がそこに働かれる、そういう力なのです。

「イエスの名によるバプテスマ」。それは、神様と私たちとの関係を正しく築くということ。神様と私たちとの信頼関係を築いていく。それは、私たちがイエスをキリスト、唯一の救い主として信じ、聖霊を授けていただくということです。

今日はシニア礼拝です。シニア、年配の方々を大切にするということは、年配の方々から仕事や居場所や生きがいを奪うことではありません。床の間に飾って、じっとそこに座っていてください、後は私たちがやりますから、というのは本当に敬うことではありません。本当に敬うというのは、お互いができる力を出し合いながら、それぞれの居場所を探していく。それはお互いの信頼関係の中で生まれてくることなのです。

「イエスの名によるバプテスマ」を受けた私たちは、神様との正しい関係を築き、聖霊の賜物をいただきました。同じように、私たちは年配の方々と正しい信頼関係を築きながら歩んでいくことができるのです。私たちもそのように歩んでいきたいと願います。

お祈りしましょう。